
生存者達のエスケープ オブ バイオハザード

航海者X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生存者達のエスケープ オブ バイオハザード

【Nコード】

N1289BA

【作者名】

航海者X

【あらすじ】

ある日、突然先生に呼ばれた数人の学生達、しかし呼ばれた生徒たちは何故か全員気絶してしまう。目が覚めると、街はバイオハザード状態だった！ 主人公の藤山 弘とその友人達は、情報収集をして事件の真相を追いつつ、街からの脱出を試みる！！

平和な日の中の異変（前書き）

どうせこの物語は私の妄想 幻想に過ぎません。

実在する人物名 建造物名 概念名 物名と被ってるかもしれないん。

ですが、全く関係ありません

尚、これは二次創作です。 話が進むに連れネタバレ（主にバイオハザード）が見られます。

上記を考慮して物語を観劇してください。

平和な日の中の異変

6月12日 8:15
ひしあひ
菱合高校

気温が上がり、誰もが半袖の服を身に着ける頃……この菱合高校は、いつもと変わらぬ景色を見ていた。

ほとんどの部活が朝練を終え、友達に会って何を話すか考えている者もいれば、つまらない授業の始まりだと今からため息をつく者もいる。

その中で後者の類に入る生徒、『藤山 弘』は……不良みたく下げパンしてたり菓子食べながら登校というわけでもなく、かといって優等生かというところでもなく。

見かけではむしろ珍しい程特徴のない生徒だ。……
……見かけでは。

「……あ、つまらねえ」

と、ため息交じりに言う、これで周りに人がいなかったらただの独り言に過ぎないが、弘は隣にちゃんと人がいることをわかってて言ったのだ。

その隣にいる人間も、弘が自分に放った言葉だとわかる。

「まあそう言わずに……また授業中寝ないでよ？」

「んなこと言われてもナア……」

「頼むよ？ お兄ちゃんの事で何かあると大抵私も何か言われるんだから……」

そう、弘の隣には女子がいる、それも二人も。非リア充から恨まれそうな状態。一人は同級生だが、もう一人は中学3年生。

「全く……よくそれで高校なんか行けたものよねえ」

「なんとでも言えエ……」

弘の右側を歩いているのは、彼の同級生の【森房 瑛梨香】やや小さめの輪郭で、他人より大きめの目。今時見かけないセーラー服 菱合高校の制服だけでも 涼しげに着こなし、髪を腰まで伸ばしている。

逆に左側を歩いているのは、彼の妹である【藤山 沙理】やや背が高く、高1の弘と身長があまり変わらない。しかし童顔でよく年齢を間違われる。ショートカットのせいか、稀に男子とも間違えられるという。痩せ型なのでちょっと想像しにくいが。……実はネト充。

何故中学生が高校の前を歩いているかというと、菱合高校は藤山の家と中学校との間のだ真ん中にあるのだ。さらに高校と登校時間が同じなのだから登校時に高校生と一緒に歩くのは不思議なことでもなんでもない。

少し歩いて、三人は菱合高校の正門まで来たところで、沙理と別れを告げ。二人になったところで……。また新たなメンバーが会話に加わってきた。

「おー！相変わらずやる気ねーなあ！」

「た……。頼むから返答に困る質問を朝からしかも大声で聞くのはやめてくれ……。」

含み笑いをして早足で近寄ってきた彼は【岡城 元樹】 弘をおちよくって遊ぶのが好きだが、決して悪いやつじゃない。実際、二人ともよく遊んでいる。こっちは完全な体育系で、スタミナも尋常じゃない。

神経が太く、いつも変わらぬ精神を保っている。部活の部長という事もあり、リーダーシップや威厳等も申し分ない。

「大体、お前も授業はまじめに受けてないじゃねーか？」

「んなこたーない！」

二人が語り合っているのを、隣にいる瑛梨香は笑いながら聞いているのであった。

……
瑛梨香と会って、教室に入るまでに岡城も含めて、二人で語り、時々瑛梨香が援護補足。

俺にとつてこれは普通の光景……これが壊されることはないはずだ……余程の事がなければ……。

三人はそれぞれの教室に 弘と元樹は2組、瑛梨香は1組入り、とりあえず荷物を置く。教室に入った後は三人とも合流することなく。それぞれの友達と笑顔を交えて会話に入る。

朝練が終わったばかりで、人は今から集まってくるのだが、弘や元樹が会話をするには構わなかった。何故なら、彼らが他の人間を引き入れて会話の輪を作っているからである。

「それでさ、この前そのコンビニで」

「そういえば最近電車が」

「っーかさー、親が」

……話の種は尽きない。

しかし、そんな笑いの尽きぬ会話の輪も、長く続かない。生徒が全員教室に入った後、ガラガラと戸を開ける音 擬音にすると古めかしく聞こえるが、ちゃんとした鉄製のスライド式ドアだ が響く。

「はいはい、いやあちょっと電車が遅れちゃってね！」

「先生……またコンビニで買い食いですか?……
ついてますよ、口周りにいろいろと」

「ええ!!?えーとハンカチハンカチ」

生徒の指摘ツッコミに気づき、急いでポケットから取り出したハンカチを口に当ててごしごしと拭くと、自分がしていたことがおかしいらしく、自分自身まで笑っている。

先生の名前は【花崎 友里】先生としての技能は申し分ないのだが、おつちよこちよいなところというか天然なところがあるらしく、朝は大抵生徒のツッコミがある。

しかし引率力の高さは職員の中でも上位に入るといふ。一見矛盾しているように見えるが事実なのだから仕方がない。天然で頼れる女先生という一風変わったキャッチコピーを持ち、生徒の人気も高い。朝のお決まりの儀式（！？）が終わった後、早速授業に入ろうとした。花崎先生は2組の担任で、1時間目が彼女の授業だった。その時、急に花崎先生の調子が変わった。

「皆さん静かに！……今から大事な決め事をします！」
……場が騒然となった、いつもは何か決める時もこんな真剣な口調にはならなかったからだ。なんだなんだと、ざわめきが起ころ。

「決め事というのは、今日私は極めて重要な仕事をします、……
……その手伝いをする人を選ぶものです」
「先生！その重要な仕事とはなんですか？」
生徒の一人が聞く。

「今は言えません、ただ、とても大変な仕事です」
花崎先生の口調がどんどん重くなる、……それほど重要で大変なのか、それとも何か裏があるのか……。弘はまだ成り行きを見守ろうと決めた時だった。生徒の一人が手を挙げ。

「先生ー！私は藤山と岡城を推薦します！」
突如自分を推薦する意見が挙げられた、……。あいつは池本 真斗！面倒な仕事はすぐ人に押し付ける俺が苦手な人間だ。

「……そうですね、この二人ならやれるかもしれません、お願いできますか？」
認めるのかよ先生！！？……予想外の展開に二人は顔を見合わせる。

花崎先生と弘達 瑛梨香も含める は仲が良く、互いに持ち

合わせている知識で談議したものだ。だから三人がどれ程仲がいいかも他人より知っている。

いや、それにしてもちよつと安易に決めすぎではないか？もう少し候補者が出るのを待って、俺よりいい人材を選んだほうがいいんじゃないか？

そんな考えを巡らす中、岡城は、

「わかりました、引き受けます」

花崎先生は、

「二人だけでは心もとないので、できればあと数人友達を連れてきてください、では、4時間目が終わった後に職員室前で待っています」

と、妙な補助を出していった……。

1時間目が終わって……

……大変なことになってしまった、内容もわからない仕事を受け入れる事になってしまった。当の岡城も……「まーいーじゃねーか！何とかなるって！」

と、この調子。

「しかたがない、よし元樹。早速誰かに声をかけようぜ」

今はそれしかない、あの口調では今から意見を変えることなどできないだろうし、いつそのこと受け入れる他ない。弘は即答した。

「とりあえず瑛梨香だ、どんな仕事でもあいつがいて損はない」

「同意見だな」

二人の意見が一致したところで、都合よく1組教室の前だった、どうやら二人とも無意識に彼女を呼ぼうとしていたらしい。

弘を先頭に教室に入り、その後ろに岡城が入る。

一番窓際の席の一つに、瑛梨香の姿を発見する。瑛梨香はあまり自分から友達の輪に入らない性格なので、一人孤立し、本を読んでいた。開け放った窓から入る風が彼女の髪を揺らす。

いや、一人ではなかった、その後ろにさらに一人、本を読んでいる女子がいる。……弘にも見覚えのある顔だった。

「よう、ちよつと話があるんだが、今大丈夫か？」

弘が声をかけると、瑛梨香は本から視線を上げて。

「え？ああ、うん、構わないけど？」

弘は岡城と共に花崎先生から言われたことを説明した。

「……ふーん」

「どうだ？」

「どうも気になるなあ……あの花崎先生がそんなに深刻に？ それも大仕事を？」

瑛梨香は小首をかしげる。

「やっぱり瑛梨香も気になるか？」

「……まあいいか、わかった、同行する」

瑛梨香が頷いた直後、彼女は背後の気配に気づいた。弘も続いて瑛梨香の後ろを見ると。さっきの女子が興味津々という調子で身を乗り出している。もはや口で言わなくとも。

—（何？何か面白いこと！？）

と、言いたげなことは3人中3人が気づいた。弘は瑛梨香が声を潜め。

「……この子も同伴させていいかな？」

「誰だっけ？この子……」

すると瑛梨香は驚いた様子で。

「え？中学校の時よく遊んだ子よ！？」

……と、言われても、弘の脳内検索では引っかけたてこない。

「……全くもう、この子は【柳野 英美】、人が多いとあまりしゃべらないから目立たないけど、少人数でしゃべれば面白いんだよ？」

そういえば、弘は中学生のころはあまり少人数で遊ぶというようなことはなかった。もしかすると大勢で遊んでいた時の人の中にい

たのかもしれない。弘は岡城に同意を求める。

「だ、そうだ。どうする？」

「お前の好きにするがいいさ、俺は邪魔で嫌な奴じゃなければ構わないよ」

その岡城の言葉が聞こえたのか、英美は一瞬だけ表情を曇らせると、すぐに回復させて岡城にペコリとお礼をした。

「おいおい、堅苦しいなあ……」

「よかったね！ 英美」

これで4人だ、と弘は思う。もうこれでいいだろうか？ どんな重要仕事であれ、4人もいれば十分だろうか？すると岡城が少し女子たちから離れて。

「なあ……そろそろよくないか？」

「だな、よし、後は四時間が終わるまで待つだけだ」

「流石に待つだけじゃ駄目だと思うがな、授業は受ける」

弘達は瑛梨香たちと別れ、自分たちの教室へと戻っていった……

平和な日の中の異変（後書き）

・・・・・・・・ええそうですよ、予告していたバイオハザードモノですよ。

え？・・・・・・・・前書きの注意点がうみねこのなく頃にと被ってる？ついでにくだい？・・気にしないでください。

今回はちゃんと人間が主人公です

大丈夫です、次回からはコメディィーになるとか、そういう路線変更はありません（ずっとシリアス風味）

それではまた〜 Bye〜（・・）”

二人の考察と異変への入り口（前書き）

さて、今回はストーリーの関係で前回より短め（？多分・・・）
）です

二人の考察と異変への入り口

4時間目が終わって・・・

チャイムが鳴って、瑛梨香は思考に浸った。

さて、そろそろ職員室での仕事が始まる。しかし、まだわからないのが、・・・花崎先生の意図だ。

なんと、3時間目に同じことを聞いてきたのだ、私は自分と英美が弘に誘われたことを話すと、先生はほっとしたようにうなずき。

さらに参加者を募った、・・・まあ、他に参加者はいなかったのだが・・・。

考えにふけっていると、瑛梨香はつんつん・・・と後ろからつかれる感じがして、振り向くと柳野が首をかしげていた。大体言いたいことはわかる。

「わかってるよ、多分弘達が迎えに来るから待ってるの」

瑛梨香が告げると同時に、教室のドアがガラガラと開いて、人数人入ってきた。

その中に弘がいたことから、例の参加者だと瑛梨香は思ったが、さつきよりも人が増えている・・・。。どうやら花崎先生は、すべてのクラスに声をかけたらしい。

弘が先頭に出て。

「瑛梨香？そろそろ行くこうかと思ったんだが・・・」

「うん、・・・結構集まったね」

そう言って瑛梨香は他の人を見やる。

「ああ、3組から【詩谷 咲】【乃村 聖也】【島谷 誠一】【三野村 雪】の4人が参加した」

詩谷咲、肩まで伸ばした髪と細い体・・・瑛梨香も十分面識がある、部活に所属していない、父子家庭だが不自由なく、明るく暮らしているそうだ。本人も明るいのだが、時折いじめに遭っているというのもあり、

心にぽっかり穴が開いたように、どこか欠けて・・・いや、抜けている。そんな彼女には・・・不謹慎だが虚無の明るさという言葉がベストマッチだろう。

乃村聖也、・・・丸顔に標準的な身体。こちらも面識がある。弘と仲が良く趣味が多く、エアガンから将棋等、マイブームがしばしば移り変わっていた。それに・・・これはあまり人に知られていないが、実はオタクやマニアの類だという噂が同級生の間でひっそりと広まっているようだ・・・。

一度ハマった趣味にはとことん入り込むので、高度かどうかはさておき、スキルの多さは他人に勝るとのことだ。

島谷誠一、細い目と長い腕や指、という彼に至っては瑛梨香にとつて面識がほとんどない　　というのは、初対面という意味ではなく、ただ単に話したことがほとんどないだけ　　、瑛梨香の第一印象としては・・・生真面目、その第一印象を強調するような黒フレームの眼鏡。

その黒フレームの中に、細い目が覗いている・・・。

三野村 雪、名前の通り雪のような白く透き通った肌でカチューシャという彼女に至っては会った事すらない、それは瑛梨香に限った事ではなかった。詩谷に話させると、どうやら転校生のようだ。一週間前に来たばかりだという。瑛梨香が「よろしくね」と挨拶すると、強いとも弱いとも聞こえる声で「よろしく」と返事をした・・・。

全員の顔合わせが済むと、岡城が全員揃ったことを確かめ。

「それじゃ行こうぜ、重要な仕事ってのををとっと終わらせちまおう」

「その前に聞きたいんだけど」

詩谷が事前確認をするように聞いた。

「その重要な仕事をするのが、なんでこのメンバーなの？」

その質問に、全員の視線が詩谷に集中した。詩谷は

「あ、いや、このメンバーが嫌だとか・・・そう言う意味じゃない

よ?・・・えとっ・・・その・・・」

詩谷が言葉に詰まっっている時、それに助け舟を出すように、乃村が補足した。

「実は3組の中には、俺たち以外にも候補者がいたんだけど、何故だか花崎先生はそれを採用しなかつたんだ。・・・だから詩谷が言いたいのは、なぜその候補者の中から、自分たちが選ばれたのか? 他にも優秀な人間がいたのに・・・じゃないか?」

「そ・・・そうなんだよ、その候補から落ろされた人は理由を聞いたけど、答えてくれなかつたそうだし・・・じゃあなんで、私たちは採用されたのかなあ?なんて・・・」

乃村の助け舟を借りて何とか結論を出した詩谷は、全員の答えを待った。しかし、誰もが口をそろえて、「わからない」だけだった。・・・

「まあ、重要な仕事ってやつをやりながら聞こうじゃねえか、今は職員室まで行こうぜ」

弘のその言葉を聞いて、全員がぞろぞろと教室を出て行った。・・・柳野だけがそこに残って、手元に持っていた手帳に何やら手早く書き記すと、それを制服のポケットにしまい、早歩きで彼らの後を追って教室を出た。・・・。

12時40分

菱合高校職員室付近

今日はいつもと比べて、先生たちがせわしなく動いていた。弘達は先生にぶつかりながら、・・・最近特別な行事か何かあっただろうか? と弘は頭に止めておいて、そのまま職員室へ向かった。

「さて・・・まだ花崎先生は来ていないか?」

職員室の前になるなり、島谷が口を開いた。それが独り言だと知

つてか知らずか、弘は返事をした。

「もうすぐ来るんじゃないか？ 4時間目の授業の片づけとかして
るだろうから、そんな早くには来ないと思うぜ」

弘の言葉を皮切りに、皆それぞれため息をついたり、手や髪をい
じったりしてそれぞれの待ち時間を過ごした……………
。

それから数分後　せいぜい2、3分だが　、花崎先生が弘達
が来た北校舎の反対側　大きい廊下を挟んで菱合高校は北校舎と
南校舎に分かれており、職員室はその廊下部分にある。　の南校
舎から駆けてきた。余程急いでいたのか、花崎先生は肩で息をして、
それでも笑顔を作って言った。

「ごめんね……………さて、本題へ入る前
にちよつと場所を移そう？」

全員一瞬だけ顔を見合わせると、先にスタスタと歩いて行く花崎
先生に、質問する間もなく早足で行くことになった。

花崎先生率いる一行は、4階にある理科室まで来た、真つ黒な力
ーボン紙みたいな壁が広がり、その端にドアがある、花崎先生は手
慣れた手つきで鍵を開け、どうぞ、と生徒たちを中へ招いた……………

中は広く、黒い壁に四方を囲まれている、この高校では昔薬品事
故で爆発が起こったらしく、少なからず被害が出た。火災は小規模
ですんだが、窓ガラスは飛び散り、騒音で近所をざわめかせ、当時
白かった壁は掃除が終わっても薄汚れていた。

普通なら保護者に訴えられて廃校だが、菱合高校は多少転校生が出
ただけで、すんでのところでなんとか生き残ったそうだ。その事故
を教訓にして、壁を汚れが目立たない黒に変え、窓は小さいものを
一番上と一番下へなるべく少なく設置し、換気扇を強化し、壁には
防音壁をはさんで厚さを増すことにした……………そして気付
けば、理科室は小さい城のようなものになっていた。

全員が入ると、ガタンと音をたてて金属製のドアが閉まり、花崎

先生は弘達を理科室の真ん中へ集めた、それを第三者から見たなら、広い部屋があるのにそれをわざわざ狭く使い、生徒たちに先生の話をよく聞こえるように考慮したという風にも見えただろう。

弘はもういいんじゃないかと岡城にアイコンタクトを取る、岡城も頷いて弘に切り出しを促してきた。弘は先頭に立って先生に訊ねた。

「花崎先生、そろそろ重要な仕事とは何か……教えてくれないでもいいのでは？」

それに加勢するように島谷が。

「私も気になってました、……理科室で重要な仕事とは一体何ですか？ 薬品の整理でもするんですか？」

それらの言葉のどこが責めるように聞こえたのかわからないが、花崎先生は俯き、目を閉じた、……どうやら深く考え込んでいるようだった。二十秒ほど花崎先生含めた全員が口をつぐんでいたが、ついに花崎先生は口を開いた。

「それを話す前に、……皆さん少しだけ机に伏せていただきますませんか？」

その出だしに、全員が驚いた、理科室の空気が疑惑という概念に包まれた……。

しかし、やがて一人、また一人とざわつきながらも机に座り、伏せ始めた。……それを見た三野村は、これから何をするかを語らずとも、命令を聞いてくれるほど信頼を置かれているのかと、自分の中の花崎先生のイメージが少し変わった気がした……。

数十秒後、全員が適当な位置に座り、伏せた。

……
……沈黙、または

静寂が、理科室全体を支配する。花崎先生が何を考えているのか……弘にはわからない。

弘は、せめてこの間だけ、考えることにした。

そもそも、花崎先生がいつものほんのりボケキャラから一変して参加者を募ったのは何故か？ボランティアの参加者募集とかだったらそんなに真剣には話さなかったし、委員会とか決める時でもそこまで深刻そうじゃなかった。

確かにリーダーシップはある。．．．時には厳しく言って生徒を統制することもあるが。「よく」がつく程の頻度じゃないし．．．．．

そして、全員揃ったらいきなり理科室．．．．．流石にちょっと唐突過ぎる。かといって、さつき島谷が聞いたように薬品整理とかだったら理科室に来るだろう。でも、それにしたってあんなに深刻に話すだろうか？そこまで真剣に話すなら、そういう資格を持った人を探して手助けを求めるか、他の先生達に求めるかするはずだ．．．．．それをわざわざ、生徒に任せた．．．．．？薬品を取り扱う説だとますます生徒を選ぶ理由がなくなってくる。

しかも、さらにわからないのはこの人選だ。．．．．．乃村が出した助け舟が全て真実なら、彼ら以外にも優秀な人材を花崎先生は拒否したことになる。何故だ？弘や岡城は推薦、瑛梨香は俺に呼ばれたから来たわけだし、柳野はそれについてきた．．．．．。3組の詩谷、乃村、島谷、三野村の4人の理由はわからない。だからこそ、そんな彼らが選ばれた理由がわからない。

花崎先生の事で思い出したが、そういえば今日は先生たちが忙しそうだった、ちよつと見方を変えれば何処か慌てているようにも見えていた。．．．．．これとも何か関係しているのか？

．．．．．考えれば考える程よくわからない、花崎先生を一変させる重要な仕事とは何か？何故今日は特別な行事中でも行事前でもないのに、花崎先生を含めた教職員達の様子が忙しそうなのか？この人選にどんな意味があるのか？

そして今気づいたが．．．．．なんだか眠い．．．．．本気で居眠りできる程度だ．．．．．！？一体どうなって．．．．．

・！

そこまで考えて、弘は閉じていたはずの目の前に火花が散るのを感じた。・・・。。。なんで？弘は机に突っ伏している・・・それなのに・・・火花？そう思ったが最後、弘は気を失った・・・。。。

二人の考察と異変への入り口（後書き）

さて、いきなり理科室に集められ、気を失った弘……
次回、いよいよ弘達と異変が出会う！

……と、いう感じで今回はノッてみました（笑）

それと、ちょっと前回注意を二つほど言いそびれたので今のうちに
言っておきます。

・筆者のセンスのような関係で、文面中に何か「ん？」と思うような
書き方があるかも知れませんが（もちろん努力はしますが一応）
・メモ帳機能で書いています。そのため、何か妙なところで改行されて
るかもしれません、（例えば、なんだかおかしいところで改行されて
るとか、もちろんこれについても確認して必要があればなるべく投稿
前に修正するようにします）

目覚め・・・・・・・・そして理科室からの脱出（前書き）

今回はなんかやたら長い気がする・・・・・・・・疲れたorz

目覚め・・・そして理科室からの脱出

.....冷たい.....。弘の意識が少しでも回復したとき。嫌という程感じたのは、自分の体の後方部分がひんやりと冷たくなっていたことだ。それを感じると同時に、.....自分が仰向けに倒れている事にも気付いた。

おぼろげな意識の中、そのままの状態では弘はそれまでの事を思い出す.....。確か.....花崎先生の何か重要なことを教えてもらおうとして、そしたら花火が見えて.....？ 意識がおぼろげだからか、どうもちゃんとした記憶が探れない。

自分は一体どうしたんだ.....？ いや、だんだん意識がはっきりしてくる。目を開けても、視界はどこかぼんやりとしているが、何か考える分には構わないんじゃないかと弘は思い、また思考することにした。

さて、と.....え〜とそれでどうなったんだっけな？ そうだ、花崎先生に重要な仕事があると言われ、全クラスから人が集められたんだっけ、それでいざ来てみると、今度は理科室に連れて行かれ、そしたら今度は机に伏せろと言われて.....それで？ここまで思い出した時、弘は自分のどこかぼやけた視界が黒く染まっていた事に気付かされた。

声も聞こえる.....。

「.....起きて！ 弘！起きてっば！！」

...瑛梨香？ どうやら瑛梨香は無事だったようだ、すると気を失ったのは自分だけなのか？ 弘はなんとなく納得した後、差しのべられた瑛梨香の手をとって、ちょっとふらつきながら立ちあがった。しかし、立ちあがった途端、また倒れそうになった。

「危なっ！！」

瑛梨香がそう叫び、反射的に弘の腕を強く握った。...かなり強く握られて 反射的だから仕方がなく、助けてくれたので文句は言

えないが 倒れることだけは免れたが、少しの間腕に痛みが残っていた。

「大丈夫？ 起こしちゃまずかったかな？」

「いや問題ない、それより……皆は？」

「あと起きてないのは元樹と乃村と詩谷だけだよ、今島谷と三野村が起こしてる。」

どうやら気を失ったのは弘だけではないらしい。……恐らく瑛梨香かあの二人が早く目をさましたので、全員を起こしてまわっているんだろう……つられて周りを見渡すと、確かに島谷や三野村が屈んで横になっている岡城達を揺さぶったり声をかけたりしている。

「一番初めに起きていたのは？ どのくらい時間が経ってるんだ？」

「私じゃないけど……そういえばどのくらい時間が経ってるのかなあ？」

瑛梨香と弘が考えていたが、島谷の声で遮られた。

「おーい、全員起きたぞ」

二人がその声に振り向くと、岡城も眠そうにふらふらしていた、その様子を柳野が心配そうに見つめている。

「うん、皆揃ったな、……しかし一体何が……」

そこまで言いかけたところで、弘は突然言葉を切った。

「……？ どしたの弘？」

瑛梨香も同じように周りを見渡して、ようやくその理由に気づく……。二人の考えを代弁するかのように、三野村が声をあげた。

「花崎先生がない！！」

その言葉に、全員が理科室を見渡す、探す、また見渡して……探すを繰り返す行動に出た。……しかし、花崎先生が姿を現すことはなかった……。

「どういうことだ？ 俺たち花崎先生に呼ばれたんだよな？ なのにいきなり気を失ったと思ったら、今度は花崎先生が消えた！？」

と、乃村が状況を簡潔に整理して聞かせる、皆異議はない……むしろ、異議がないからこの状況なのだ。……すると瑛梨香が。

「まあ……とりあえず、うん、そこに皆で座りましょう、…立ち話じや疲れる」

瑛梨香の提案に、乃村は面倒だとちよつと首を傾げたが、皆が賛成意見なので彼の反論は力を持たなかった……。

「さて……一体なんでこんなことになったのかしら？」

座るなり三野村が提示した本題に、素早く回答を申し出られる者はいなかった。皆が、首を捻る。というか、答えられるはずもないのだ。……考えても出てくるのは疑問だけなのだから。

「この状況じゃどんなに考えたって謎しか出てこないぜ」

「俺も同意見だ」

「私も」

弘の意見に、岡城と瑛梨香が賛同する。しかし島谷が反論した。

「と、言つたつて、花崎先生がいなきや情報も何も出てこない」

島谷の反論も最もだ。……しかし、ここでもっと最もな意見を全員が聞くことになる。

「ちよつと待つてよ、それなら外に出ればいいじゃない、そして誰か先生を呼んで、花崎先生を探そう」

三野村の意見だった。……一瞬の沈黙、そして、ああそういえばそうだな 等という称賛と賛同の声、そして、当の三野村がゆっくりと……廊下へ出るためのたつたひとつの手段であるドアに近づくと……三野村の手がドアのノブにかかり、捻った……。これでドアは開くはずだった。

いや……正確には捻れてさえないなかった……何かが引っかかってノブはほとんど回っていない。三野村は疑問を覚え、もう一度捻るしかし、一度目と同じ結果だった。どんなに力を入れても捻れない。当然ドアは開かない、押そうが引こうが変わりはなかった……。

事態にだんだん気がついてきた三野村は、動作を繰り返すことに表情が強張っていたが、弘達に振り向いた時には驚愕に目を見開いていた……。

「ドアが……開かない!!」

三野村がそう叫んだ時、全員が一度は耳を疑っただろう、三野村がドアの前から退くと、代わって岡城や乃村や弘や島谷までもが試したが、結果が変わることはなかった……。

「くそっ！ 花崎先生が消えた拳句、俺たちはここに閉じ込められたってわけかよ!! また謎が出てきちゃった!!」

弘は怒りと動揺を隠せない。岡城達もうろたえている、そんな中、柳野が手に持ったメモ帳とシャーペンを制服のポケットにしまったのを、弘は見た気がした……。

弘は椅子にどかつと派手に座って、貧乏ゆすりを始めた瞬間……

……紙か何かをこするような音が漏れるのを、確かに聞いた……。

「……………」

ポケットにメモなんか入れたかな？ と、弘はどさくさに紛れて確認することにした。ズボンのポケットから取り出したのは……紙には違いないのだが、A4ぐらいの大きさの紙に両面印刷したものをなるべく小さく折りたたんだものだった。……一番最初の行を見ただけで、弘には 弘でなくとも多分今理科室にいる全員にも

その紙が今どれほど重要か理解した。

「皆!!! これを見る!!!」

なるべく大きな声で、この騒音に負けない程度の声を出した。すると、あたりは一気に静まり、その目線が、弘の掲げた紙に集中した。弘はその状態で、紙にワードソフトで書かれたであろうその文章を読み上げた……。

〈私が選んだ生徒へ〉

これを理科室内で読んでいるということは、多分私はもうそこにはいないでしょう。何故わかるのか？ 答えは簡単、私が自分

であなたたちのまえから消えたからです。私の事は探さないようにしなさい、これはお願いではなく、命令です。しかしこんな簡単な説明で納得される程あなたたちは子供ではないでしょうね？ わかっています。理由もちゃんと書きます。

理由の前に、私が教職員というのは本当の職業でないことを言うておきます。いや、私だけじゃない。ほぼ全員の先生がそうなのです。もちろん、公務員ですからいけないことですが。今はそれを置いてください。本当の職業は【メディカルエリットクリエイトセンター】、E R I Tエリットの研究員 職員といっても正解ですが です。名前ぐらいは聞いたことがあるかもしれませぬ、そこまで知名度が低い所でもありませんから。

このE R I Tが、今日この街を災害を起こす可能性がありました。それを少しでも回避するため、あなた達をスタンガンで気絶させ、生き残らせたのです。なら、もう少し多くてもよかったです、とも言えますが、あまり多いと他の先生に不信がられますし、これからのことを考えれば、例えば自分勝手な人間を選ぶわけにはいかない、そんな思考の末に選ばれたのがあなた達なんです。でも、そんなことせずに一斉に避難すればいいじゃないかと思われるかもしれませんが、それも叶いませんでした。可能性というのは、今日の実験の際、失敗すると街に被害をもたらすかもしれないという危険なものです。私は反対しました、しかし上司や部下を含めた他の人は全員、愚かにも賛成だったのです。この実験を台無しにする力は………残念ながら私にはありませんでした………なので、こっそりと一人で動かざるを得なかったのです。

権力というのもあります、私が何を唱えても、結局多数決で否定されてしまうからです。それにもし台無しになどすれば、私は殺されるかもしれないのです。いや……もう殺されているかもしれない、なぜなら私は既に、こうしてあなたたちに事の次第をかなり教えているのですから。私を追うなといったのもそのせいです、私は追われているでしょうね。それもE R I Tのメンバーから。

そして、その結果が……その理科室のドアの向こう側です。と、いつても、私が出る際に施した細工により、内側から開けることは難しいと思います。……私としてはあなた達に出てほしくありません。しかしどうしても出たいなら……ドアについている窓を割ってでもして出るのがいいでしょう。しかし、見せつけられる光景に耐える力が自分にはないと思うなら……そこから出ないほうが賢明です。

理科室にある物はいくらでも使って結構です、責任は負いませんが。

これに書いたことは疑うことのできぬ真実です。そのため、邪魔にならないようであればこの書類はとっておいてください。もし、さらに詳しい真実をあなた達が欲するなら……行きなさい。

あなた達に選ぶことのできる選択肢は二つ。死の危険を冒してでも真実を求めに動くか、自らの命を守るため、一分一秒でも長くその理科室に留まるか。……です。花崎より

手紙を読み終え、弘がそれから視線を上げた時には……ほぼ全員
の表情が驚愕に変わっていた。

「それ、どこに……？」

「俺のポケットの中だ」

長い沈黙の後に口を開いた乃村の質問に、弘は答えた。その声が瑛梨香には心なしか……元気がないようににも思える。

瑛梨香は信じていた、自分や岡城、そして弘は、花崎先生をかなり信頼していると……しかしその信頼は、花崎先生のそんな一面を知ることではできなかつた……。自分たちがこのことを知っていれば、もう少し楽になつたらうに……。いや、もしかしたらここにい

る人間ほとんどが、そうだったかもしれない。

乃村が気を取り直したかのような口調で言った。

「その手紙が本物なら、今この理科室の外はどうなっているんだ？
それで真実ってなんなんだ？」

島谷が悲しいくらい冷酷に、しかし正確に答える。

「内容からして、多分藤山が偽装したものじゃないかもね、メデイ
カルエリ……いや、ERITの名前は俺も少しは知ってる。でも真
実ってなんだ？ わけがわからない……」

そこに詩谷が少しイライラした様子で参入した。

「じゃ……じゃあもういいじゃん！ 早く外に出てその真実つての
を探そう！！ 早く窓を……」

「待て！ 詩谷！！」

ドアの前へ歩み寄る詩谷を、乃村は腕をつかんで制止した。し
かし詩谷も反論する。

「何！？」

「あの手紙には、ハ見せつけられる光景に耐える力が自分にないと
思うなら……そこから出ないほうが賢明です。~~~~書いてあった

！ その内容から察すると、相当ひどくて危険な状況なんだ！！

……むやみに外に出るのは危険だ！」

「まあ……それはそうだけど……！！」

詩谷の語気が静まってくる……どうやらあきらめたようだった。

「よし、じゃあ……行くぞ？」

その後の話し合いの結果、結局外に出ることになった、理科室に
留まろうとする者がいなかったのだ。

「ちなみに……どう行くの？」

瑛梨香の質問に、島谷が答える。

「まず、そこにある試験管立てで窓を割る、窓に残った破片などは
なるべく多く取り払う、そしてその後、三野村が窓を使って脱出、

外側から鍵を外した後俺たちも脱出　これだけ」

「脱出後は？」

「外の状態による、あの手紙からじゃ何かすごいことになっている、としか書いてなかったし。気絶してたせいで何が起きたのか推理する手がかりが全くないしな」

確かに、と弘と瑛梨香は同時に言った。周りからくすくすと笑いが聞こえ、緊張の空気が……一時でもほどけた気がした。しかし、冗談抜きに島谷の言ってることも正しい。気絶してたわけだから、地震が起きたとも火災が起きたとも想像できる。

「じゃあ乃村、悪いが頼む」

「任せろ！」

そう力強く引き受けた乃村は、全員を一旦遠ざける、その後近くにあった試験管立てをつかみ、その腕を伸ばした状態で回転する。遠心力で力を増した試験管立ては、抵抗なく曇りガラスを打ち砕き、その破片を辺りに散らす、乃村はその感触から、南極の氷壁をツルハシかなにかで砕いているような気分だった。

その動作をもう3回繰り返して、ようやくほとんどのガラス片が枠から落とされる、後少しだ……！

乃村はどこからか手袋を見つけ出し、それを両手にはめる、すると、試験管立ての下部　台の部分　を枠の右端に立て、それを左端まで勢いよく滑らせる。……たちまち残っているガラス片は刈り取られていく……カミソリに刈り取られる髭のように。あるいは木工道具のカンナで木が滑らかなになるように。……この動作を、他の三辺全てに適応する。最終的にガラス片は全て取り払われた。

乃村が合図をかける。

「終わった、それじゃあ三野村、気をつけて」

「わかったわ」

三野村は、ハンカチを枠の一部にかけて、そこに手をかけると、台上前転の如き軽やかさをもって外へ飛び出した。

弘達は待った、何を？　当然、鍵が開けられる音を………しか

し、理科室に残された彼らに聞こえてきたものは……三野村の悲鳴
だった……。

「きゃああああああああああああああああああ！！！！」

「……………！！！！！！……？……？……？……」

弘達はすぐに無理やりドアを開けようと必死に押したり引いたり
ぶつかったりしてみたら、しかし、嚴重に閉じられた扉は開かない。

しかし、すぐにその後、三野村のほうから鍵を外す音が聞こえ、三
野村のほうから開けてきた。その顔は蒼白、がたがたと音が出そう
な程震えていた。

「……………あれは……………あれは……………」

三野村がか細い声を絞り出して言った。それを聞いてか聞かずか、
弘が思い切り外へ飛び出した、……一見何がどういうわけかわから
ない、しかし、ちよつと視線を移した時……悲鳴の原因を発見する
……………。弘と、彼を追ってきた全員の視線に入る物、それは人だっ
た。だが横たわっていて、全員が真っ赤に染められていた。…………そ
れが絵の具の類だったならと…………その時彼らは強く思っただろう…

…………しかしどんなに願っても、彼らの鼻を強くつくその異臭がそ
の願いをかき消す。

…………死体だ……………と誰かが口にしたら、死体が横たわっている
のだ、しかも尋常な死に方じゃない、体のあちこちが抉られ、内臓
が溢れ、ついでにその溢れた内臓は引きちぎられている。この非常
識な光景に、島谷は吐き気を訴え、瑛梨香と詩谷は眩暈を起こした。
弘と乃村はかるうじて耐えたが、あまりにも残酷すぎる……………

…………。
「なんだよ……………これは……………！？」

「……………残酷だ……………」

ようやく二人の口からでてきた言葉は……………それだった、見たまま
のことを言った……………。弘は、その姿勢のまま……………思い出し
て……………理解した。

そうだ、これが手紙に書かれていたことってわけか……………！！

「見せつけられる光景」ってのは……………こういうことだったのか……………!!!?」

「!?!? 誰か来るぞ!?!?」

弘と、調子を取り戻した島谷と乃村が廊下に出る、すると、確かに人影が見えた、3人とも いや、恐らくここにいる全員が知っている、その人影の主は、この高校の数学教師、谷吉先生だ。

「! 谷吉先生!?!」

飛び出そうとした乃村を、島谷が制止する。

「……………なんだよ?」

島谷が目を見開いている、その視線は確かに谷吉先生へ向けられている。だが……………。

「……………確かにあれは谷吉先生だ、だけど、ちょっと待て、あの足取り、変じゃないか? 様子もだ……………あの位置にいるなら見えているはずだ……………なのに少しも慌てない」

……………言われてみれば……………俺たちがいる理科室の入り口と死体と谷吉先生の位置関係は多少の誤差はあれど一直線上だ、谷吉先生には死体どころか俺たちの姿も見えているはずなのだ。なのに、谷吉先生はその場でふらふらしているだけで驚くどころか声も出していない。弘は不安を覚えた。

しばらく息を殺して全員が視線を谷吉先生へと向けていると、反対方向にある階段からまたしても人影が現れた、だが……………。「ひつ……………!?!?」

一番最初に声を上げたのは瑛梨香だった。続けて柳野、島谷、弘と続いていった……………。

階段から出てきた複数の人影は……………まるで血のように赤く彩られた人間達だった……………。

「なんだよあれは……………!?!?」

弘の質問に答えるのは……………彼らが一番最初に見つけた……………横たわっていた死体だった。

「ツ!?!?!」

入り口にいた全員が反射的に理科室の中に飛び込み、ドアを閉める。

しかし、ドアの窓を壊してしまったが為に……瑛梨香は死体の目を確かに見てしまう……。

「おかしいよ……あの目は確かに死んでる……なのに何故動けるの!？」

「! 危ない!！」

ドアの下でしゃがんでいた弘はその体勢から素早く瑛梨香にラリアットを決める! 瑛梨香と弘の体は理科室のさらに奥へと飛び込む、ドアに視線を向けると、ドアの窓に赤い手が何本もかかっている。島谷達もそれに気付いていたのか。既にドアの近くにはいない。乃村が弘の所に近寄る。そして声を潜めて訪ねてきた。

「お、おい藤山……どうする?」

その質問に、弘は同じく声を潜め。

「俺が知るか……!! とりあえずこの状況を突破しないと……奴らが入ってくる!」

ドアの窓には、死体の上半身がこちらに入ろうと必死になっている。……どうみても、友好的な態度じゃない。弘、乃村、瑛梨香は島谷達の所へ行き、声を潜めて話し合う。

「もしかしてあれが手紙にあった「状況」ってやつなのか!？」

「そうだとしたらかなりまずいな」

「まずはここから離れよう! 他人に知らせなきゃ!」

全員がパニックに陥っている時、突然瑛梨香が声を上げた。

「どうやって……あ、そうだ!！」

何かひらめいたように、瑛梨香が大きく目を開ける。注意が一気に瑛梨香に集まる。

「どうした?」

「ちよっと皆聞いて……」

「成程、確かにこれなら……!」

「今はこれしかない」

瑛梨香の閃きが話されると、次々と賛成の声が上がる。

「よし、やろう！」

岡城の言葉を皮切りに、全員がドアの左下と右下の陰に配置される。左下には岡城 柳野 三野村 島谷。右下には弘 瑛梨香 乃村 詩谷が配置された、特に指示はなかったが、個人の意思でわかれたらこうなってしまったのだ。

「行くぞー！！」

岡城の合図に、全員一斉にドアに体当たりする、両開きするドアは思い切り外側に開け放たれた…………… ドアにすがりついていた死体はものすごい勢いで飛ばされ、反対側の壁に叩きつけられる。ぐちゃっ……………と嫌な音をたてながら。ドアを出てすぐ右にはまたしても人間……………！左にも人影があるが、階段は右にあるのだ。右を突っ切るに限る……………！！

「……………ウウウウウウウ……………」

両手を伸ばす人間に、弘の回し蹴りが直撃する、人間はよろけるだけだが、今の弘達には救いだっただけだ。岡城はトップで階段前にゴールする、そこにはさっきの谷吉先生がいた。岡城はすかさず助けを求め。

「先生！！そこにある死体が動いて襲ってくるんです！すぐに人を……………先生！？」

岡城がいくら話しかけても、谷吉先生は返事ひとつしない、それどころか、さっきの人間のように両手を伸ばし、大口を開けて接近してきた。

「岡城オオオオオオ！！」

谷吉先生の歯があたるかあたらないかというところで、乃村が岡城を右から突き飛ばす、そこで乃村は一旦わずかに距離をとる、噛みつき攻撃を大きく空振りした谷吉先生は、大きく前につんのめった、その頭に、乃村の裏拳が叩き込まれ、さっきの人間のように派手によろける……………。

「悪い乃村!!」

「構わない!それより行こう!」

後についてきた弘達とも合流し、階段を駆け下りる、その途中で
もやはり人間、弘達は前衛が弘 岡城 乃村 後衛が瑛梨香 柳野
詩谷 三野村 島谷という陣形を構築し、人間たちを無力化して
いく。蹴る、殴る、打つ、倒す。ありとあらゆる攻撃方法を使つて
前衛が暴れ、後衛は女子たちをかばうように島谷が周囲を警戒する。
「職員室までもう少しだ! ここからは一気に突っ切るぞ!」

その合図で陣形が一気に崩れ、全員猛ダッシュで駆ける、足が遅
い者は速い者に手を引かれながら……、そしてついに弘達は職員室
に到達した……………。

全員が集まると、代表するように弘が前へ出てノブを捻る、しつ
かり回るのを確認するや否や、素早く開けた、先頭の弘に続き、全
員中へ飛び込んだ!

そこで彼らが見たものは……………!???

目覚め・・・・・・・・そして理科室からの脱出（後書き）

ああもう、いつになったら敵を「人間」以外の表現で呼べるんだろ
う!?

なんて、自分自身に文句を言うようなセリフをこの話書いてる中で
何回言ったことか。ていうか、理科室出るまでがめっちゃ長いやん
け 戦闘シーンはそんなに長々と書かないつもりですが、以後注意
して書きますよー(´×´)・・・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1289ba/>

生存者達のエスケープ オブ バイオハザード

2012年1月14日15時48分発行